

未来を拓く

# 居場所ハウス

いばし  
ハウス

第5回



「居場所ハウス」内に展示した活動の  
写真(上)。絵手紙教室の様子

及び、運営の支援を行って  
いる。「居場所ハウス」で  
の筆者の役割の1つは、  
日々の出来事を記録するこ  
とであり、イベントの時だ  
けでなく、イベントのない  
時の様子なども写真に撮  
り、「居場所ハウス」内に  
展示している。

「〇〇さんが写って  
る」「こんなイベントもし  
ていたのを初めて知った」  
と言ってくださる方もお  
り、展示した写真は「居場  
所ハウス」を知ったり、歩  
みを振り返ったりするま  
かけになっている。日々の  
出来事を記録すること、展  
示やウェブサイトなどの情  
報発信というように、目  
に見える形で記録を編集す  
ること。こうした作業の蓄  
積によって「居場所ハウ  
ス」の歴史や価値が共有さ  
れていくと考える。

もちろん、外部の者でな  
くても日々の出来事は記録  
できるが、見慣れたものを  
記録し続けることは意外と  
難しい。初めて目にするも  
の、普段見慣れないものの  
方が記録しやすいのであ  
る。つまり、外部の者は地  
域の人々が見逃してしま  
う日々の出来事を、記録し

た、地元で収穫した茄子や  
ピーマンを「居場所ハウ  
ス」に送ってくださった方も  
いるし、逆に「居場所ハウ  
ス」のある末崎町の特産品

## 外からの関わりで 地域をつなぐ 補い支え合う社会へ

やすい立場にあると言え  
る。また、外部の者には地域  
外で築いている関係がある  
ため、「居場所ハウス」と  
他地域の人々との媒介者に  
なることがある。例えば、  
東京に住んでいる筆者の知  
り合いが「居場所ハウス」  
に来て絵手紙教室を開いて  
くださったことがある。筆  
者の知り合いだけでなく、  
被災地支援のため遠くから  
来てイベントや教室を開い  
てくださった方も多い。ま

であるワカメをお礼に送る  
といったやりとりがなされ  
ることもある。  
今後、人口が減少してい  
く我が国では、地域がそれ  
ぞれの特色を活かしなが  
ら、人や物、情報など足り  
ないものを補い合い、支え  
合うことが大切になる。さ  
さやかだが、その具体的  
な形が「居場所ハウス」で生  
まれたことがある。「居場所  
ハウス」をきっかけとして生  
まれたこうした関係をどう  
継続させ得るかを考えてい  
きたい。

ただし、外部の者は、遠  
く離れた他の地域の人々と  
の関係を媒介するだけにど  
とまらない。地域には良  
くも悪くも様々な人間関係が  
築かれているが、外部の者  
はそれらの人間関係の周縁  
に居るため、時として人間  
関係を越えた関わりを持つ  
ことができる。地域に築か  
れている人間関係の中に  
は、外部の者はそう簡単に  
は入り込めない。しかし、  
だからこそそれらの間を行  
き来し、結果として同じ地  
域に住む人同士を媒介でき  
ることがある。

筆者が上手く運営する答え  
を知っているわけではない  
し、運営について一方的に  
アドバイスする立場でもな  
い。それどころか、末崎町と  
いう慣れない土地での住ま  
いや食事など、地域の方々  
はいつも筆者のことを気に  
かけてくださっている。  
哲学者、鷲田清一氏の言  
葉に次のようなものがある。  
「他者への(心)として  
の」関心が、相手の側に  
逆方向の「他者への関心」  
を呼び起こすということ、  
こういう反転がケアの核心  
にはあって、ケアという  
ことなみの相手を「お客様」  
として遇することは、管理  
としてのケアと同じへ、こ  
の反転の可能性こそであ  
らうかじめ殺いでしまうとい  
うことである」(※)。

ケアだけでなく場所作り  
や震災復興でも、一方的な  
支援の弊害が指摘されるこ  
とは多い。支援しながら、  
しかし、それが過剰になら  
ないような支援とは何か。  
慣れない土地での生活を始  
めた時に、一方的に支援す  
る立場ではあり得なくな  
った筆者のことを振り返れ

ば、生活の時間を共有する  
ことにそのヒントがあるよ  
うに感じる。支援し/支援  
されるという関係が築かれ  
たところこそ、外部の者  
だけでも、地域の人々だけ  
でも作れないような場所が  
実現されるのである。

地域には様々な当たり前  
がある。記録するまでもな  
い当たり前のこと。この人  
とは関わり、この人とは関  
わらないという人間関係の  
当たり前。外部の者はこう  
した当たり前を共有してい  
ないからこそ、それらを記  
録したり、媒介したりしや  
すいと言える。

(※) 鷲田清一『思考のヒ  
シックス』ナカニシヤ出  
版・2007年

先に筆者は「居場所ハウ  
ス」で運営の支援をしてい  
ると書いたが、一方的に支  
援しているわけではない。

ロー・田中康裕

(終わり)